

## 花菖蒲の今後

神奈川県 松下 卓生

園芸の本質は他者との差別化であり、品種数量の多少が、その園芸種の文化的なバロメーターとしての判断指標となる。その点で見るとハナショウブは現在までは数千種類の品種が作出されてきたので日本を代表する伝統的な園芸種と言われている。

しかし、これは過去から現在までの実績としての呼ばれ方で、今後のハナショウブ界は、私たちの今後の取り組み方によっては、その評価が変わってしまう可能性がある。

園芸は、その時代の価値観や流行によって変化していくものと言われる。過去に好まれたものが現在や将来に好まれるとは限らない。現代は多種多様な趣味があり、それまでのように園芸が広く普及されず、興味のある一部の人達が深く掘り下げて研究している状況である。品種が多くなるということは、その花に対する価値観が多様化するということが必要で、そのためには多くの人間が携わりながら展開して行かなければならない。その意味でハナショウブに携わる人が増えなければ品種も減り、文化的な価値も下がってしまう。

これからハナショウブが維持発展するために必要なものとして、過去の品種保存を広域で行うことが一つある。これは個人では規模的に無理なので花菖蒲園に適切な品種保存を行ってもらえるようになるだろう。

私のような個人趣味家としては、それぞれが好みの品種を栽培し、さらにその中で交配して新しい品種を作り出していくようになる、というような人が数多くいるとハナショウブ界全体が発展していくと思う。

どんな園芸種でも、職業的な会社や組織で

大規模に育種開発を行う方が高度な結果を出すことが出来ると言われる。しかし、比較にならない程小規模なアマチュア育種家の存在その園芸種の品種展開を多様化させ、品種展開を進めていくことは、青いバラを作出した小林森治氏の実績からも明らかである。

今後のハナショウブ品種作出に必要なこととしては、耐暑性の高いことと芽数の多いこと、連続開花性が強く開花期間が長いことではないかと個人的には考えている。

種を蒔いて苗を育て、目的の収穫物を得ることに園芸の全てが詰まっていると思う。将来の希望を託しながら一粒ずつ種を蒔き、2年間育て、待ちに待って開花したハナショウブは自分が思っていたものとは程遠いものばかりではあるが、その中から少しマシなものを選んで他の花と交配してまた種を取る。毎年実生が開花するたびに、来年に期待を持って交配をしてしまい、いつしか毎年の恒例行事となって続けてしまう。たまに良い花が咲いたと思うと翌年は劣化してしまうものも多く、そうかと思うと年々良くなっていく花もある。いくら続けても完成しないところがハナショウブ実生交配の面白さなのかもしれない。

花は平和の象徴であると言われる。自分自身も健康で仕事も順調で余裕があるから花の栽培ができるのだろうとありがたく思いながら自分のできる範囲でハナショウブを栽培している。植物管理を仕事にしている割には技術的に足りず、枯らす品種も多く辛い思いをすることも多い。しかし自分にしか作り出せない花がいつか咲くことを信じながら、ハナショウブと共に暮らしている。

今後も更にハナショウブの話が沢山できるように、日本花菖蒲協会の発展を心よりお祈りする。